

tab

No.
26

2
0
1
1
/
1
/
15

後藤美和子 / 木村和史 / 野村龍
福島敦子 / 石川和広 / 中村剛彦
水島英己 / 秋川久紫 / 下村泰史
倉田良成

榊 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：広場で／01
野村龍：旋律／03
中村剛彦：朝の庭／05
福島敦子：すつきり／07
石川和広：うたい始める／09
秋川久紫：臨界の宴・狂詩曲（ラプンディール）／12
水島英己：水が走っている／14
倉田良成：ありま山・花より外に——私の小倉百首から／16

文

- 下村泰史：春日若宮おん祭く遷幸の儀／20
木村和史：古材を洗う／22
あとがき集／24

画：和田彰

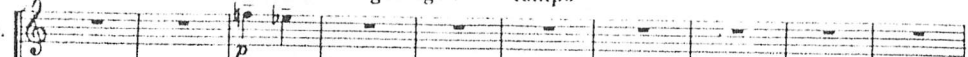
第26号／2011年1月15日（毎奇数月発行）


編集発行人／倉田良成

〒230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／katei511@k3dion.ne.jp

calando sehr getragen tempo

1. 

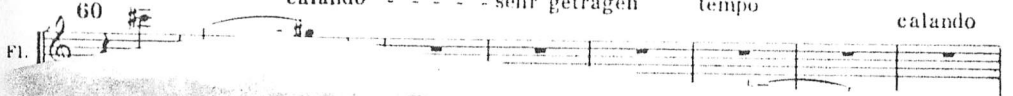
b. 

mit Dampf.





calando - - - - sehr getragen tempo

Fl. 

K

T

P

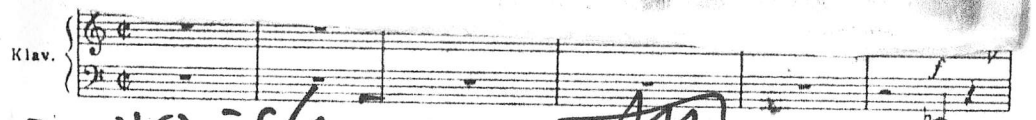
G

Klav

T

F



Klav. 

Yoru no Noz-wa ishi -

2010

後藤美和子

広場で

斜めから見られただけで

頬骨が緊張し

それは肩と持ち上げ

もう羽ばたいて行ってしまおう

しばらくは茶色い海を

ラシヤの外套を着て歩いているが

やがて靴に水が滲み

砂地に足が食い込みだす

放してくれ、とそれは言う

町は塵灰の白色

枝々に結わえつけたスピーカーから

禁じられた曲が流れる

話してくれ、と彼女は言う

頬杖をつき

音が鳥を救うよう

たくさんの真水を木に注ぎながら

彼女の青緑色の瞳

見つめ合い

やがてその羽根を抱きしめる

鳥のことばも抱きしめる

朝、それは窓から飛び立って
もう海へも行かない

広場で話し、歌ったのちに

きつと撃たれて墜ちるのだから

(皆既蝕五六)

野村龍

旋律

董の吐息はあまい

従って董とのくちづけもあまい

夏の風がしっとり吹き始める日

砂時計は全ての砂を失ってしまう

それでも 獣道に時間の足跡は残り

苦い眠り薬が 瞳のなかへ穏やかに滴り落ちる

山羊の乳を湛えた金色の鉢を掲げて

大鷲は 磨き上げた月の翼で 濡れた風を切り裂いて進む

霞んだ影の口笛が 水の耳の奥深くまで染み込むとき

獣神^{しがみ}は切り岸に遅しい蹄を打ち込んで駆け抜ける

《私の名を通して祈りなさい

言葉は再び 鮮やかに与えられるだろう》

菊頂の乾き切った舌にも 癒しの蜜はたつぷりと注がれ

紛いものの心臓は 燃える拳にたちまち握り潰される

火の乳首

光の歌声

磯辺で遊ぶ 桃色の残り香を

飢えた魂達が片端から貪り食らう

咽喉から 悪臭を抉り出した後

葉漬けの狂った道化は 戸惑いながらも もういちど星を掴み取る

美しく甘い地図で

そう 天球の腐った秩序を最後に包み取るために

中村剛彦

朝の庭

朝ごはんを作っていると

小さな泡が台所の床に湧きあがる

「お前はいつも小さいな」

とつぶやくといつの間にか泡は消える

カレンダーをめくり

日付をたしかめ今日のゴミをまとめる

記憶の中で家族がよみがえる

ひとりひとりを確認する

「そうか、ここに罌があったのか」

洗面台で剃刀を眺め

髭を剃ることの意味を見失い

庭にいるあなたと犬を見つめる

「おれはずっと嘘をついているのかい？」

「仕方がないよ、時すでにおそしさ」

とりかえしのつかない生をもう終えたいと

あなたに初めて告白したのはいつだったのか

言葉はついに解放してくれなかったと

あなたは犬に餌を与えてくれている

私の感謝を分け与えるように

窓を開けると

あなたも犬も消えてしまいかもしれないと
ゆがむ頬に確かな風を感じる

人は夢から目覚めることはないのだと
今日初めてわかった気がする

福島敦子

すつきり

トイレのドアを開けると

うんこがついたパンツとももひきとジャージを一緒に脱ぎすてて

父がおびえた目ですわっている

うんこ まかしたん？

うるさい！

お風呂で下半身を洗ってあげる

おしりと足をシャワーで

綺麗にして乾いたタオルで拭いていたら

またうんこが出てきた

わたしの腕に勢いよく降りかかる

うわあああつ！

知るか！

放心して洗い場にすわりこむ父

しばらくしたらまた洗ってあげる

流れていくうんこ

すると父はなぜ今

お風呂にいるのか分からなくなっている

わたしは

長い間苦しんだことがあったので

ついさっきのことをすつと忘れられる父が

うらやましい

そうやな

すんだことは忘れよう

いたずらに卑下しなくていいよ もう

洗い場に飛び散ったうんこのかけらが

お湯と一緒に流れていく

父はすっきりした表情になっている

石川和広

うたい始める

言葉づかい お使い

ひとつずつ ひとつずつ

習いごと うまくいかない

見当違い くりかえして いやんなる

いやんなる やめてやる くやしい

空がまぶしい くやしい ふゆに

くやしい くやしい ああくやしい ああ くやしい

こないだ 林芙美子の詩を

読んだ へたつぴいかと勝手に決めつけていて

今まで読まなかったけど

ずいぶんさばさばした 悲しそうな

でもさっぱりした 生きている言葉であった

森光子が何回放浪記を主演したかは

知らないが

林芙美子を見直した

僕はくやしいという感情を「もの」として感じている

腹に つめこまれて

おへそが ぐりぐりに固い

やさしく 生きる邪魔をする 空気を深く吸って はいて

お腹をやわらかくしてあげるのに精いっぱい

僕の大学の時に お世話になった 先生が死んだ
大学を出てからも お世話になった

オヤジにも母にも話せないよくわかんないことを
先生に話していた

先生はまだ 還暦に 行っていないかった

ひとは死せる定めなり

といえども ずいぶん なんといい なんだという
もわつとした感じ

クリスマスの日に先生の家にお参りに行った

線香をたてて 奥様と

先生の 話をした 緊張したけど よかつた

僕の 大好きだった 先生

もう僕は 先生と話せない

こ・こ・ではもう話せないが

奥様と 話せて よかつた

雪が降るホワイトクリスマスだった

ウソみたいだがほんとなのだ

―積もってはいないけど

人生思うとおりに行かなくて悔しかったって

仕方ないのだと

そう言い聞かせようとする

僕に

僕の 辛抱するところに

きしみそうな体に

しかし体や ところが

くやしい もっといろんなことをやろう

という もっと いやもうちょっと いや

もうちょっとのちょっと

でいい 雪が降ったりする

冗談ではない

寒い風が 植木を

倒す 寒い時代が やってきて

僕はいつまでも身をちぢめている

むぼうに たたかうことは できない

けども

好きに生きてやろうと思う

ひとの人生に押しつぶされないように

奥様がいった あのひとは マイペースなひとで

困ったこともあったけど 好きな ことを したと思う
！！
って

先生 死んだけど 死ぬまで ずい分頑張られたんだと 僕も思うんです

林芙美子とは付き合いはないけど

空っ風に喉を痛めそうになりながら

しかしその喉は生きていたように 思った 僕もそうありたい

そうありたいと願う

願うことが生きていたらできる

死んでいてもできるのか もしれないが

僕は 死んだことがない

(空気の中を斜めに落ちていく静かさ)

臨界の宴

あらゆる階段が下ることしか出来ないように厳格に仕組まれていることに気付いた時、瑠璃立羽の群れが一切を覆った。風はなく、形態の破綻もない。意味を拒絶する透過性を伴った壁も、虚無を誘う室内楽の穏やかな調べも。

素焼きが恋なら、作陶は大いなる眠りだ。火力と釉薬の二人芝居。そのト書きに書かれた過剰なものと不足がちなもの配合の度合いが生命の発色を左右することに多くの人は気付かない。そしてもし経済原論の肩先が化学の右腕に触れたなら、幻視の窓から愀気の湖に入水してみるのも悪くないかも知れない。

縁日の綿菓子みたいに露店に並べられる天候デリバティブ。際限のない不安は、秘匿された改造拳銃によつて音もなく撃ち抜かれる。それは煌びやかなイミテーションの鉋物を信じた罰であり、安易な虹色の企みに加担してしまった報いだ。豪雨の厚い舌先に愛撫される無垢な白犀の閉じられたまどろみの中で。

この世界に果たして優しい有刺鉄線というものがあるのだろうか。弟子を破門した師匠が経験する落日。だが、途切れることが直ちに終焉を意味するとは限らず、宙空に叩き付けられた意志などに淡い期待を抱いてはならない。

狂詩曲（ラプソデー）

ここは野戦病院で、最も深い傷を受けた者が無条件で敬意を表される。ただし、時に彫刻刀が発見されることもあり、流した血が本物か否かも基本的に問われない。横倒しの樹木の間から稀に放たれる吹き矢の一撃。その実体が懸想文だと言うなら、飛翔や潜行からエクスタシー（救済）が得られるというのは危うい誤謬でしかなく、古楽の旋律が倒壊と圧搾の日常から精神を隔てるというのもまやかした。

期待は毒薬で、絶望は媚薬？ 悪い噂をキャベツみたいに嚙り尽くした所で、謹厳な父親が鸚鵡になったりはしないだろう。

心踊る断章は、例えば夥しい生の浪費を眺めること。あるいは不眠の夜を惑い、明滅する狂人の枕を矢継ぎ早に裏返すこと。

勝者のいない夕刻。怯懦の祈りへの抗いを止めた少女が踊る雨曝しの部屋。朽ちかけた校舎の裏手には牙のない禽獣が眠り、疲弊に包まれた円形広場には、容易に毀れることのない優美な悪漢が立っている。ジャン・コクトーの手になる王侯風の気球に寄り添う純白の恋情。過剰な甘さを秘めたその欠片たちは、凧いでしまった噴水を遠巻きにして、強靱な加速を見せつつ一散に中空の彼方へと昇ってゆく。

水が走っている

棘が人生の小川をぎっしりと流れている、というのは吉増剛造の詩のタイトル

それを読んで私は

会ったこともないミホさんの

甲高い気にはさわらないその声と普段着のような喪服姿を

たぶん何かを通して聞いたり見たりしたそれを

心の底に立たせていた

「死の棘」のミューズの逝去を悼む

レクイエム、それが吉増の詩のテーマの一つだが……

なにが流れているのか、あるいはなにを流すのか

小岩や国府台の病院や市川の流れ

加計呂麻の海のきらめき

崩れかかった建仁寺垣に囲まれて「家庭の事情」が

始まる、始まる、まるで

「初めに、ことばがあつた」かのように「疑惑」があつた、そこから

ミホと敏雄が熱中して編みあげた

かけがえのない罪の織物が流れている、流された

今になっても

そのひそやかなかげりの孕む熱

いつまでも覚めない悪夢の檻の

まぼろしが棘のようにぎっしりと流れている

人生とは呼べない

なにかすっきり変わってしまった「こと」の川でも

そこを流れて、そこから始まる

「死の棘」もある

そして、その棘を

ぎっしりと流れているそれを

制圧しない、浄化しない、どこまでも熱中して編みあげてゆく

私たちは

(神ではない、神ではない)

最後のわたくし小説家たちであった、いやあるべきだ

「ムンダネ、ヤ、マカン、チュ、ドウ、バカ」(物の種を蒔かない人はバカだ)と

ミホさんは伸三さんに教えたという

すべての種を蒔き

その棘を心の底に深く育てよ

「だがすべては変わった。あの駿馬を乗りこなす者はいない。」

イエイツの嘆きも

ムンダネとして心の奥底に蒔いておこう

その上を水が走っている

倉田良成

ありま山

かれぐなるをとこのおぼつかなくなるなどいひたるによめる

ありま山いなの篠原風吹ばいでそよ人をわすれやはする 大式三位

私の前に長い巻物がある。絵と文字が交互につらなる紙本に書かれてあるのは、まず修行する若者である。博物館の光源は作品保護のため、非常に限られたものになっていて、私は身をかめなければそこで繰りひろげられている物語を読み取ることができない。巻物の中では、若者の心と体の四方八方から瘴気のような悪心を送り込もうとしている影があるが、若者の壁たまみたいな霊がごとくこれを撥ねつけているさまが、速い筆致で一氣に描かれる。次の絵は初老の俗人である。子どもは成長して京師みやこで働いている。彼の膝のうえには一匹の老猫。猫は生まれたばかりの子猫のころに拾われて、そのとき瀕死の様子だったので、生きもの好きの男は、手ずから柔らかい布にしみこませた米のとき汁などを吸わせてやり、介抱したので、猫はすっかり男になつき、やがて男の腕に抱かれたまま大往生を遂げる。男の妻の顔が小さく描かれているが、少し表情が暗い。三番目の絵の主人公は女である。場所は妓楼のようなどころだ。妍を競う女たちの中でも彼女はとりわけて美しく、才さいあり、権勢をほしいままにしている。わが思いものになってくれと言い寄る男はあまたあるが、たった一人を除いて心ゆるした者はいない。その一人とは、若く、誇り高く、やはり美しい若者で、女をほかの宴に行かせないため、楼にのぼりつづける。金が尽きてくると男を楼から出させないため、女のほうが自分の手文庫から金を用立ててやる。やがて百日をかぎりとして、男にも女にも金の算段

が尽き果て、二人して高楼から身を投げるが、女のほうは助かってしまい、やがて楼主と話がついて女は尼になる。最後の絵は老夫婦である。五十年を添い遂げ、家子ゆたかに、子や孫の数多く、白い酒蔵のかたわらには紅く梅など咲くのが描かれている。二人で卓をかこみ、寿の酒を酌み交わしている。紙の上にあらわれる雲流の曲線を隔て、翁が命終を迎え、媼が悲嘆して泣いているのが見えて、これで卷子の絵が終わる。さいごのところに悪鬼の言葉がこう簡単に記される。さいしょ、修行の若者が禪定する前に魂をこちらに取り込んでやろうと色々試みた。やわらかい心なものにはがねのような霊のかがみに何もかも撥ね返されるうち、若者はとうとう高悟してしまい、もう手が届かなくなった。若者は次に猫好きの男に生まれ変わった。こちらは瀕死の猫に生まれ変わって、うまく男に飼われることになった。媚を売って心を蕩かし、魂のゆるびを待つてのどくびを掻き破ってやろうかと眈々と狙っていたが、猫の寿命のほうに先に尽きてしまった。こつちがあんまり男になつので、内儀はうすうす感づいていたようだが。それから若者は女に生まれ変わった。このおりの代で、うまくゆくとと思った。金をつかわせ、立場をなくさせ、あまつさえ身を投げるところまでいったが、なんという業の強さか、うつろな鳥の魂となつて中有をただよう羽目になつたのはこつちのほうだった。その間、尼となつた女、じつはもと修行の若者が、悪鬼である死んだ情人の魂の菩提を弔つて行ずる読経は、こちらにとつて地獄の苦しみだった。次は生まれ変わった若者に早くから取り憑いておいた。うるわしい少女の形で、生まれ変わった少年を誘い、夫婦となった。傍目にも実際にもむつまじい二人だったが、こちらはいつ彼の霊を破却し、魂を亡ぼしてやろうかと、ほんとうはゆたかな黒髪に隠して、うなじの上あたりに大悪笑のすさまじい牙の大口を開けていたのだ。だが高悟の心は悪心よりも逸く、

より高い亡びと再生のきざしを巡るので追いつくことができない。否やまたも逃したか。じゅうぶんに生きた男の命数がこつちのもくるみに反して、いともたやすく三界の向こうに消尽し、女でいるこつちのほうが苦しくも堅固な男の業にことほがれつつ生き延びる。ノウ、こんなに辛いことがあるのかと。よくよく見るに、この悪鬼の言葉の執筆はどこの権現社の神官のようである。さいごに小さく、いまわしく、けがらわしい紐のもつれみたいな線條は、花押であろうか。蕁麻の花仙紙に書かれた和歌であろうか。博物館をあとにして夕ぐれ迫る町へと降りる。私が次の代で寄り憑くだれかに殺されるために。

花より外に

大みねにて思ひかけず桜のはなをみてよめる
諸共に哀と思へ山桜花より外に知人もなし

もう十年ほどもここに住んでいるが、十年くらいではなかなかこの土地になじんだことにはならないらしい。けれどここは子どものころから知らなかった土地ではない。私が小学生だったとき、今と違ってプール施設のある学校は少なかったので、夏休みなどにプールを開放している他の学校や、市民公園に付設されたプールをよく利用した。この公園プールもそんなひとつで、炎天下、何キロも歩いて来て泳いだことを覚えている。この町のプールは谷の最深部だが、反対側が上がっていった丘の頂上にはしばしばほかの町でもそうであるように、学校などが立っている。その中学校のある丘の上からは、南には港湾施設と真つ青な海がきらめいて望まれ、北に向くと海に向かって突き出たいくつものミサキに、禅宗の総本山の蒼いいらか、北町八幡宮の鬱蒼とした繁み、岸谷

杉山社のばけものタブノキの大樹冠の三つが、そろって見^み齧^{はる}かせる。またこの丘自体でも貝塚が発見されたり、かつては不動の滝があつたりもしていた、いわば聖なるエリアと言つていい。晴れた日などによくここに散歩に来るが、そんなとき、この中学の全校生徒で学校の周りを何周も何周もするよ^うな長距離走がおこなわれているのに遭遇することがある。

十四、五歳の少年たちが眉根を寄せて、あるいは苦し^ううにあえぎながら、ひたすらわが身を責め続けるのを見ることに、ある種の感動を受ける。彼らは苦悩の中で灼かれ、その苦しみが官能的なまでに甘く醸されて、彼らの精神に一滴一滴したたつてゆくのがよくわかる。徳育をうんぬんするときに、この点がしばしば教育者たちの指導感覚に強くうったえるのかと思う。少年たちはいっしょうけんめいで、わき目もふらず、完走した者は校門のところまでへたり込んでいる。ふと学校の横手の、ブランコのある一角に目が行った。そこに三、四人の少年たちの姿があるが、彼らは教師に隠れてそこで長距離走の時間をやり過ごしていると知れた。ぶらぶらとからだを揺すり、公園樹で背を搔いて、足許には数本のたばこの吸い殻まで落ちている。陽光に背を向けた、シニカルで、卑劣なやつらのうしろすがた。けれど私は気づいている。少年だつたかつての私は、学校を周回して清冽な汗を流す側にはいなかったことを。むしろ、公園にたむろし、隠れてたばこをのみ、斜にかまえた薄汚い論理でまじめな友人たちを酷評したのがかつての私だ。まごうかたなく、私はあのうしろすがたの少年たちにほかならなかつた。けれど、とまた思う。ミサキの神に愛されてあおじろい夕ぐれの森をさまよふのは、刻苦の正しい汗を流す者ではなく、地上の論理を好まない、私のような子どもではなかつたか。貝塚にはときおり人骨も混じっていることがあるという。魂の飛びやすい夕闇のひまに、よくもこの世から隠されなかつたものだ。

春日若宮おん祭へ遷幸の儀

昨年 of 年末、十二月の十六日の晩、春日若宮おん祭を見に奈良へ行つた。祭が始まるのは十七日の午前零時ということなので、京都からは余裕を見て十時位に車で出ることにした。

この祭の来歴については、あまり知らなかったし、今もそう詳しくなつたわけではないので、ここで細かく記すことはしない。闇で行われる神秘的な行事があると、何人かから聞いていたので、ただそれだけの興味で行つてみたのだ。

国道二十四号線を南下して奈良に向かつた。普通の人は翌日も仕事がある平日である。途中の街でそこに住む友人のことを思い出したが、深夜の祭に誘うのはやめた。京奈和自動車道のナトリウムランプが、白い息に滲みながら流れてゆく淋しい深夜である。車通りも少ない。

奈良の街に入つても、その淋しさは変わらなかつた。著名な祭があるというのに、明かりの少ない街は閑散としている。大仏前の辺りに百円パーキングを見つけて車を入れた。誰もいない。この辺りは休日の昼間は大勢の観光客で賑わうところだ。以前近くに住んでいたこともあつたので、飛火野の広がりや雑踏が作りだす明るさに慣れていたので、この晩たどりついたそこは、誰もいない真つ暗なところだつた。人の姿も声もなく、時たま遠く鹿の声が聴こえるのみである。駐車場看板の照明の他に灯りはなく、目の前の奈良公園は茫漠とした闇である。車から出ると、刺すような寒さが降りてくるようだった。思えばここは街とも公園とも境内ともつかぬ場所なのだ。賑わいを失つたそこは、すでにどこでもない、境界的な場所としての性格を取り戻すのかもしれない。若宮おん祭が行われる春日大社に行くには、この暗闇にまず

入らなくてはならない。LED式の小さなヘッドランプを頭に着けて、暗い方に向かつた。

森の中の道に入る。さつきまで誰もいなかったのに、ところどころに身を寄せ合うようにして歩いている人々の影があつた。両側に真つ黒な木立が並ぶ中、懐中電灯の明かりが砂利道を点々と照らしている。森の方に頭を向けると、鹿たちの眼がいくつも動いた。行くほどに人の姿は増え、声も聴こえてきた。少しほっとした気持ちになる。明るい気持ちになつてきたのは、人影に出会えたせいだけでもないようだった。気づくと、森の中の広い砂利道にあかるい場所がまだらに連なつていた。眼が慣れてきて初めて判つたのだが、月明かりが木々の梢の隙間から差し込んできていたのだ。後ろから照らしている月の明るさに驚きながら、ヘッドランプを消した。

道を行くと、人々が二列に並んでいるところに行き着いた。その最後尾に着くように促される。どうやら道の両側に並んで、神がその道を行くのを見送るのだそうである。おん祭の始まりとなる「遷幸の儀」だ。十一時過ぎ、まだ列はざわついている。そこかしこから連れと交わし合う声が聞こえてくる。携帯電話や懐中電灯の灯りがいろいろなところで、灯つては消えたりする。暗がりに慣れた眼に眩しく感じられた。

そうこうするうちに、人々のざわめきの向こう側から、おおおというような声のようなものが本当にかすかにだが渡つてきた。時折聴こえる自動車の音や飛行機の音のようにも思われたが、それは減衰していくことなく、緩やかに波打ちながら少しずつ近づいてくるようだった。間遠に打ち鳴らされる太い太鼓の音が聴こえてくると、それはこの祭に関わる音声であることが確信されてきた。

その声が聴こえてくるように思われる道の先を、眼で探る。黒々とした木々の下に時折人工光を放つ人の列があり、その奥に眼を凝らすのだ。敏感になった眼には、暗がりの濃淡も映る。おとおという声は一層輪郭をもつたものになつてくるとともに、なんだかわからない暗いゆらめきが尖り始めた視野を覆い始めた。少し気が遠くなるような気がした。

おらぶような声はつきり聴き取れるようになり、誰もがそちらに顔を向け始めた。携帯電話や懐中電灯の光が少しずつ鎮まり、空気が張りつめていく。ふたつの炎が見えてきた。ふたりの神官がそれぞれ、一間はあろうかという松明を引きずって私たちの間を通っていく。旧軍の軍服のような服装の中年男が神官のすぐ後ろを歩く。胸から顔のあたりがあかあかと照らし出されている。男は時折松明を杖のような棒で叩く。松明からこぼれ落ちた火が、暗い道に二本の轍を残していく。神官たちが通り抜ける頃には、おとおという男たちの声はもう耳元まで来ているかのようだった。何人もの男たちの低い声がそれぞれ山なりに長く発され重なっていく。それは私たちの言葉をつくる声でもなく、歌をつくる声でもないものだった。

衣も顔も白い男たちがそんな声あたりを圧するようにしてやってきた。その塊の上に突出て白いものがあつた。そこに神がいるのだと思つた。その周りを雲のように白い男たちと層状の声とが覆っているのだ。先の松明のせいもあるのだろうか、その白くて大きなものは、どこか茫漠とけぶって見えた。その曖昧な塊がうなりをあげて通っていく時、体が激しく震えたのは、厳しくなってきた寒さのせいだけではなかったらう。畏ろしいものが通つたのだと思つた。

それから信徒たちの列が、それぞれおおと口ずさみながら続いた。それは先の闇を押しつけていくような硬い音声とは異なり、馴染みのある人の世の声だった。その列が行くころには、白くけぶつたものは月明かりとしての輪郭を取り戻していた。

列が行ってしまふと、今度は見物客であるわれわれがその後を回る。人々の顔を月がまともに照らし出す。いくつもの顔がまぶしく光っていた。時々人々の脚の間に、先の松明のかけらが赤々と光っているのが見えた。

列がお旅所に着いたのは一時を回るころだったらう。明るく照らし出された庭で舞を含めた神事「暁祭」がくりひろげられる。巨大な北斗七星が天空に掛かっているのを背景に、神官や舞手が行つたり来たりしていた。

祭を見る人々は先ほどの緊張から解放されたようで、場の空気は柔和に思われた。しかし、気温は一層下がり、凍りついた地面から体温を奪われる思いがした。この冷たい大気の中で祭を執り行う人々は、決して厚着には思えなかった。やはり心が違う状態になっているのだろうか。

この暁祭は午前二時を回る頃まで行われ、私はそれを一通り見届けて帰途に着いた。

春日若宮おん祭自体は、その後も十七日の深夜まで続き、さまざまな神事が執り行われるということだ。十七日昼間の稚児行列などは可愛らしいもので、多くの人が見物に来る。この日経験した祭、特に暗闇の道で執り行われる「遷幸の儀」は、それなりの人が集まるものの、普通の仕方で見光化されたお祭りとは大きく異なつたものだった。知覚してはならないものが間近を通るのを感じる、そういう場が作り出されていたように思つた。

この祭については、奈良にお住まいの寮美千子さんが、twitter上で生き生きと報告されていた。その「つづみやき」をまとめたので、最後にそのURLを記しておく。

<http://togetter.com/li/80368>

古材を洗う

毎年、天候が変わる。一年目は連日の強風に悩まされ、二年目は雨ばかり降って、道路や草むらが水溜りだらけになった。三年目の今年は風も雨も少なく、記録的な暑さに見舞われる。

入院していたこともあって、仕事開始は7月になった。再度の脳出血を招かないよう、いちおう注意する必要があるのだが、体を動かすことも必要と考える。右半身の力がやや弱くなっている、右膝に負担がかかり、入院中も東京にいるあいだも痛みがとれなかった。それが、熊牛で作業を再開したとたんに痛みが消えた。アスファルトの路面が、砂利混じりの盛り土の地面に変わっただけでそれほどの違いがある。わたしの膝はもう、アスファルトの世界では生きていけないかも知れない。それから握力も弱くなっている、材木を抱えると手から滑り落ちそうに感じる。今までどおりの感覚で作業をすると、あちこち落としものだらけになりそうだ。とりあえず慎重に物を持つことを心がける。

老化にいくつもおまけがついた体だが、とにかく二年目も現場に立つことができた。

去年完成しているはずだった12畳の作業小屋は、束石を埋めたあと作業を中断したままで、今年も手をつけられるかどうか分からない。雨晒しになっている古材の山も、早くなんとかしないと腐って使いものにならなくなる。洗ってきれいにして、ふたたび雨に濡れないように屋根をかけてあげたい。仮積みしである薪も黒ずんできていて、茸の姿も見えている。薪小屋も急ぎたい。柳の枝でこしらえた風呂の板囲いと、余り物を張ったポリカの屋根もみすぼらしいうえに、寒くて風のある日は体にこたえる。霜の降りる10月までにはなんとかしないと、脳に危険が迫るかも知れない。寝泊り小屋も下屋も、細部の工事がまだ

たくさん残っている。ほんとうはのんびり畑の手入れなどしながら働きたいのだが、そんな余裕はなさそうだ。

看護婦だった伯母に、半年間は絶対に無理しちゃだめだよ、と言われていた。無理しなければ、かなり元に戻るらしい。ただ、どこから先が無理になるのか、判断が難しい。気分は、フルタイムで働きたがっている。どこでブレーキを踏んだらいいか。それよりも、動き出せるのかどうか。

とにかく、ゆっくりを心がける。やらねばならないことは何も無い。できること、したいことだけをやる。淡々と生きながら、淡々と夢を織る。そのように歩きたくて選んだ道のはずだから、と言いつけさせる。

さいわい、病院から老人ホームに戻った母は、元気を取り戻している。いらいらしたり落ち込んだりする症状は一進一退で、低空飛行ではあるけれども、「こっちは心配しなくていいから、仕事がんばりなさい」とまで言ってくれるようになった。どうしてそこまで回復したのか分からないが、まるで昔の母が甦ったようだ。代わりに、7月の下旬、「お父さんの認知症が進んでいます」とホームから連絡があった。薬をばらばらにしてしまったので、そのつど職員が手渡すことにしたという。夜中に他人の部屋に入ってベッド脇で呆然と立っているのを発見されたことも何度かあったらしい。幻覚も出始めているようだ。

そんな状態でも父は、普通に会話ができる。無理難題を言って周囲を困らせたりしない。電話で父は、頭が混乱して弱気になっている自分を、「今までは細い線と太い線の二本でやってきたけど、今は細い線だけになってしまった」とわたしに説明した。「俺はもうだめだ」と、訪ねてくれた親しい友人にこぼす

こともあるようだ。

若いと死は避けられない。わたしにできることは、父と母を孤独感のなかに放り出さないことだ。そのためには、ひたすらわたしが温かくなるしかない。ここにきてようやく、そのような心構えができてきた。

ふたりの低空飛行を横目で眺めながら、とうより目をつぶって、今年の作業の手順を組み立てる。実際は、手順を思い描くよりさきに、気持ちと体が動き出している感じだ。隣人の話では、あつちに姿を現したかと思うとこつちに出没したりして、わたしの動きはかなり落ち着きに欠けているようだ。

早く建物に取りかかりたい気持ちを抑えて、地味な作業の古材洗いから始めることにした。長いものは6寸角で6メートル以上、重すぎて片側を持ち上げるだけで精一杯というものも何本がある。それらは後回しにして、抱えて歩くことができるものから洗い始める。

苛性ソーダの水溶液を刷毛で塗り、真鍮ブラシとたわしを使って汚れを落とし、水をかけて苛性ソーダを洗い流す。それからシユウ酸をお湯で溶かした液を水で薄めて塗り、これはこすらずに水できれいに洗い流す。アルカリで汚れを落とし、酸で戻して中和する方法で、刷毛でシユウ酸を塗ったとたんに、本来の色がさあつと現れてくる。この瞬間がなんともいえない快感だ。

材は泥だらけで、腐れかけている部分もあるので、薬品の濃度を少し強めにする。汚れとともに腐朽菌にも死んでもらおうという作戦だが、うまくいくかどうか分からない。ふたたび雨に当たったら、菌はすぐに復活するだろう。茸もまた生えてくるかも知れない。割れの奥深く入り込んでいる土砂は取りきれないので諦める。コールタールをべつたり塗った古材も混じっていて、暑さで溶け出し、きつい臭いが鼻をつく。洗うと、水溜りに油の層が浮かぶ。そのような材は住居には使えないので、薪小屋などで活躍してもらおうと思う。刻みの入った櫓の柱は、何十年か経っているはずなのに、ほどもほぞ穴もまだしっ

かりしている。大きく湾曲した櫓の梁材と組み合わせて、温泉小屋に使いたい。うまくいけば、風流な露天風呂ができあがるかも知れない。

長靴をはき、帽子をかぶって炎天下の作業を延々と続ける。とにかく暑い。Tシャツは汗だらけ、前掛けとズボンの前はホースの水でびしょ濡れになる。温度は三十度を少し越える程度で、東京の暑さと比べたらなんでもないようなものだが、空気がきれいなせい、かじりじりと焼けつくように感じられる。ここから100キロ離れた生まれ故郷の夏も、たしかこんなふうだった。遠からずわたしの体はこの地になじんで、昔と今がひとつながりになるような予感がする。

8月中旬、ほぼ1カ月半かかって、大きな材を中心に8割がた洗い終える。北海道の短い夏のほとんど全部を洗いに費やしたことになる。最後まで終わらせなかったのだが、10月末の霜の日までそんなに遠くない。やらねばならない仕事がたくさん残っている。

一日中歩き回っていたせいか、汗をかき、水を飲み過ぎたせいか、血圧がかなり下がってしまった。めまいがして、声にも力がこもらない。それで勝手に、薬を半分減らしてみた。9月に入って担当医に事後報告したら、薬をやめてみましょうか、と言う。それは不安なので、半分のままにしよう。この夏の暑さは、病みあがりの身にはこたえたような気がするが、無理は越えなかつたと勝手に判断する。

confidence

ジャック・ペランのナレーションを楽しむに、映画「Watadori」を借りてきたが、ナレーションは本当に僅かで、全編ただひたすらに鳥が鳴いていた。(後藤)

初孫が生まれて、おじいちゃんになった。父と母のところに孫の写真を送ったら、喜んでくれた。老人ホームから「ふたり並んでテレビをご覧になるなど微笑ましいお姿がよく見られています」という年賀状が届いた。(木村)

私は学生時代、いわゆる「華の仏文」でした。横文字コースなので、会話・作文の授業がありました。先生は、もちろんフランス人。非常にクレバーで、それでいて暖かみのあるマダムでした。ある会話の授業の際、「人物当てゲーム」をやってみることにしました。ある人物をひとり決め、その人物についてひとつずつヒントを出していきます。出来るだけ少ないヒントでその人物を当てた人の勝ち、という、とても簡単なゲームです。私の番になりました。「そのひとは、ベルギー人です。」「そのひとは、緑色の眼をしています。」「ここで、マダムが、人物を当てました。みなさん、私を選んでのが誰だったか、おわかりになりますか？ 答えは、そう、エルキュール・ポワロです。今はすっかり文学早の私にも、このように、まるで夢のような、恵まれた時代があったのです。(野村)

やっぱり父のことは書かないほうがいいのか。書いたあとでいつも後悔がつきまとう。微笑みと沈黙で毎日を生きればそれでいいのか。そのほうが人間として優れているのか。そんなふうにも思う。だけど認知症の介護について、包み隠さずに葛藤を正

直に書いてあるものを読むとほっとする。わたしだけじゃないんやと思う。父だけじゃないんやと思う。人と人はつながっているんだと当たり前のことをあらためて知って、救われるような気がする。(福島)

今号掲載の二篇もそうだが、最近自分が書いている散文詩は意図的に各連の文字数を合わせ、全体を絵として見た場合に左右対称もしくはそのバリエーションになるようにしている。実を言うと、かの椎名林檎もある時期からアルバムを作る際、曲のタイトルの文字数をシンメトリーに並べるという芸当をやって来ており、そこに触発された部分がないこともない。東京事変として出した四枚のアルバムは全てそうになっているし、最近の『三文ゴシップ』で言えば、順に二・三・四・五・六・七・一・七・六・五・四・三・二という文字数で曲が並んでいたりする。前アルバム「加爾基 精液 栗ノ花」における「茎」がそうであったように、ここでセンターに来ている「匂」という曲がこのアルバムの中で特別な意味を持つていることは言うまでもない。こんなことはもちろん創作の重要な要素でも何でもないはずだが、自分はこういう一見馬鹿げた職人的こだわりが大好きだ。(秋川)

昨年の夏は酷暑。そして冬はとても寒い冬ですが乗り切っていきたいと思います。新しい年が来ました。本年もよろしくお願いたします。(石川)

今年目標はひたすら世界の古典を読み、日本の古典を読み、自らの位置を確かめることです。そして詩が自らのなかで確かなものとなるように。今年もぐわんばる！(中村)

昨年未は、久しぶりに彼方的なものに触れる機会が重なった。今号に書いた「春日若宮おん祭」もその一つだ。私にとつての詩とは、具体的なひとつひとつのものとからたちのぼる、彼方的なものを言葉の構造に置き換えるということだった。非詩的な日常にまみれて忘れていたそのことを、この十二月の出来事は思い出させてくれたように思う。

これを機に今年は今ままで書いてきたものをまとめてみたいと思っている。(下村)

去年は「詩誌月評」に追いまくられた一年だった。半年を過ぎて、他の仕事が増えた。一段と月評の仕事もきつくなった。予期したことではあったが、体力も知力も低下期にあるものとして、相当にこたえた。いろんな意味で勉強にはなった。すばらしい詩に出会えた。それを発見できたときは嬉しかった。今年は時間をかけて自分の詩を作っていくかと思っている。夏にはアメリカにも行く。一ヶ月近くの滞在を予定している。そこでの新たな出会いと発見を夢見ている。(水島)

猫を死なせてしまい、半年が経っても魂は抜けたままだ。そんなことを知ってか知らずか、新百合ヶ丘でこの冬続けてふたつ、救われる催しがあった。ひとつは、川崎アートセンターでの、カネフスキーの映画『動くな！死ね！甦れ！』。もひとつは、昭和音大での、高橋悠治の演奏。前者は三十五年のつきあいになる親友からの、上映最終日の朝のメールで知り、後者ではかぶりの隣の隣席に、すっかり禿頭になった大学の先輩が居た。抜けた魂は、呼べば戻るかも知れないのだ、呼び方次第で、と道を教えてくれる出来事だった。

「夜の野面石」は、山下清の学園逃亡生活中の風貌についての、ある批評家の言。

(和田)

たまたま携わることになった仕事で、主に王朝和歌について、校正をやっている。これまで気にはなっていたが、触れる機会のそれほど多くなかった歌人たちに関し、これだけまとめて見られるチャンスはそうそうはないと思う。このなかで、個々の歌人がどうこうという話ではなく、いろんな著者の先生方によって初めて知ったといっている、歌の「享受史」というのが興味深いと感じた。百人一首で言えばわかりやすいが、例の「ちはやぶる」の結句が「水くぐる」であるか「水くぐる」であるかという類。『古今集』の解では後者でしかあり得ないが、百人一首を編んだ定家は明らかに「水くぐる」と読んだであつたらうことが、コンテクストをたどると明瞭になるといえる。これは実は定家の固有な見解とか作者の意図を超えたところに立ち現れてくる問題であり、案外に奥深いことを物語っているのではないか。歌は、個人から個人だけでなく、個人から集団(お付きの女房や同胞など)や、集団と集団(家から家)の間で取り交わされるものであることや、ある言葉が意図的にか無意識的にか、音韻等の共通によって(藤井貞和氏の言う擬表として)別の言葉の含みを持たせられること、などがこれに関係する。これらのことが、完全にある集団や統率者の管理下に置かれるとは考えにくい。やはりここにも、「現実」に見えざる編み目を掛けたような、神話的思考の滲出を認めざるを得ないと思う。

(倉田)